

# 消滅した和製漢語

## —造語法の分析—

高野繁男

### 一 はじめに

近世の蘭学、近代の洋学の移入に際して、大量の〈和製漢語〉と呼ばれる訳語が生産された。しかし、それらの和製漢語の総てが、現代語として今日まで受け継がれているわけではない。むしろ、消滅した語の方が多いのである。

現代の語彙研究は、この消滅した語を顧みることなく、現代も受け継がれている語〈現存語〉のみを議論の対象にしてきた。語の履歴を追う語誌研究では、こうした消滅語には関心が向かないものであろう。しかし、訳語法や造語法に踏み込むことになると、この半数を超える消滅語は、現存語と同様に貴重なメッセージを提供してくれる。なぜ残ったのか、なぜ消えたのか、この視点から和製漢語の現在までの展開を整理してみたい(1)。

(一) 資料

『百科全書』

(原書) W. R. Chamber's "Information for the people" V2, 1868, London  
 (訳書) 文部省編纂局『百科全書』九一冊、一八七三～一八八四（明治六～一七年）、九二冊のうち、本稿では  
 〈文系〉四冊と〈理系〉三冊を対象にした。

a 文系資料

「經濟論」Political Economy（堀越愛国訳、一八七四／明治七年）

「論理学」Logic（塚本周造訳、一八七八／明治二一年）

「修辞及華文」Rhetoric and Belles-Lettres（菊池大麓訳、一八七九／明治二一年）

「言語学」Language（大槻文彦訳、一八八四／明治一七年）

b 理系資料

「化学」Chemistry（小林義直訳、一八七五／明治八年）

「天文学」Astronomy（西村茂樹、一八七六／明治九年）

「物理学」Natural Philosophy — Matter and Motion（小島鉄三郎、一八七七／明治一〇年）

本資料『百科全書』には、手元に英語のオリジナルと訳文があり(2)、容易に原語と訳語を対照することが可能であり、その訳語が現存するか、消滅したかのその後の消息を追跡することができる。

## (二) 和製漢語

さて、〈漢語〉とは、本来、中国語話者が漢字音を造語要素として造った中国語のことである。日本人は、それを古代から漢字とともに移入し借用語として用いてきた。その語彙数は、現代語では和語を大きくうわまわる。たゞ、この中には漢語に精通した日本人話者が、漢字音を造語要素に造った語も含まれている。とくに、近世の蘭学、近代の洋学を受け入れる際に、西洋語の訳語として大量に生産した。

この日本語話者によつて造成された語を中国製漢語と区別して〈和製漢語〉と呼ぶことにしている。なお、造語要素である漢字自体は日本人話者によつて造られることは稀である(3)。したがつて、二字以上の複合語が和製漢語の形態ということになる。また、三字語は二字語に接頭辞、または接尾辞が付いてできたものがほとんどである。さらに四字以上の和製漢語も二字漢語が基本になつた複合語がほとんどである。このことから、〈和製漢語〉とは「日本語話者が字音形態素(漢字音を形態素とすること)によつて造成した複合語」ということになる。

本稿は、この立場から、上記の資料に用いられている和製漢語のうち二字漢語を中心に議論を進める。ただし、適宜三字語、四字語も論に加える。

## (三) 資料の語構成

資料の二字漢語の語構成を一覧にする。和製漢語と中国製漢語(借用漢語)の比率を示すためである。また、

〈表1〉『百科全書』2字語の構成

事 項		和 製 漢 語 (日本製漢語)			借 用 漢 語 (中国製漢語)	総 計
		現 存 語	消 滅 語	小 計		
文 系	経済学	78 (11) 37.0%	211 (91) 73.0%	289 (31.1%)	639 (68.9%)	928
	論理学	57 (15) 34.8	107 (44) 65.2	164 (29.4)	393 (70.6)	557
	修辞及華文	90 (17) 39.5	138 (88) 59.5	228 (30.2)	528 (69.8)	756
	言語学	89 (17) 40.0	134 (49) 60.0	223 (29.3)	538 (70.7)	761
理 系	化学	158 (45) 46.6	181 (81) 83.4	339 (55.8)	268 (44.2)	607
	天文学	62 (15) 39.2	96 (36) 60.8	158 (41.0)	227 (59.0)	385
	物理学	81 (25) 49.4	83 (37) 50.6	164 (40.7)	239 (59.3)	403
合 計		615 (145) 39.3%	950 (426) 60.7%	1,565 (35.5%)	2,832 (64.3%)	4,407 (100%)

\*現存語の( )の数字は蘭学で造られた和製漢語。

\*文系の消滅語( )の数字は『日本国語大辞典』(2版)に登録されているが『分類語彙表』(増補改訂版)に登録されていない語。理系の消滅語( )の数字は『日本国語大辞典』(2版)には登録されているが『文部省・学术用語集』に登録されていない語。

和製漢語を〈現存語〉と〈消滅語〉に分けて示した。前述のように、本論が議論の対象とするのは、このうち〈消滅した和製漢語〉である。

〈表1〉が示すように、資料に用いた作品から得た二字漢語の総計は四、四〇七語である。このうち〈和製漢語〉が一、五六五語(三五・五%)みえる。ほんどうが、蘭学・英学の翻訳に際して新たに造られた訳語であると見える。一方、すでに使われていた語(既存語、中国語からの借用漢語)は二、八三二語(六四・三%)ある。

翻訳とは、外国語を本国語に置き換える作業である。おおくは、先ずすでにある語で置き換えるである。本国語が日本語の場合、和語があり、中国語から入った漢語があり、西洋語を音訳した洋語がある。これらの語の中から概念の同一のものを探し出し訳語として採用する。しかし、的確な語がない場合は、すでに

ある語の意味を拡大したり、他の分野から転用したり、さらには他の言語から借用したりすることが行われる。しかし、この方法には限界があり、とくに明治初期のように性急に異文化を受け入れようとする場合には、結局、新語を造つて置き換えるのが有効であった。

ただ、この新語造りも簡単なことではない。しかし、ともかくも、この困難な作業をやつてのけたのが明治期であった。どうして、こうしたことが可能であったのであろうか。その最大の理由は、漢字音を造語要素とする造語法が、すでに蘭学時代に確立されていたことである。さらに、日本より先に開国した中国西学の成果を利用することができたことも力になつたと考える。

こうした条件のもとに大量の〈和製漢語〉が生産された。この和製漢語の造語法は、まさにこの漢字音を造語要素とする訳語法によるものである。とくに、前代を引き継いだ理系においては、蘭学の和製漢語の利用とともに、その訳語法が活用された。〈表1〉からも、そのことが理解できよう。たとえば、和製漢語の〈現存語〉には「化学」四五語、「天文学」一五語、「物理学」一五語の蘭学が造成した和製漢語が含まれている。これは、これら三分野の現存語に占める二八・二%（三〇一語中八五語）に当たる。

#### （四）消滅した語

上述のように、江戸の蘭学、近代の洋学において大量の和製漢語が生産された。新知識の移入のために新たに造成された訳語である。ただ、すでに述べたように、これらの和製漢語の総てが現代語として今日に伝えられ使用されているわけではない。〈表2〉に〈消滅した和製漢語〉を整理して示す。

本稿で用いた〈消滅語〉の認定法について述べる。なお、蘭学辞書『訳鍵』を参考までに添えた。

『日本国語大辞典（二版）』（以下「認定一」）に当たる。次に〈文系の語彙〉は『分類語彙表（増補改訂版）』（「認定二」）に当たり、〈理系の語彙〉は『文化庁・学術用語集』（「認定三」）当たり認定した。（表1）の注に同じ）

中国製漢語は、近代の中国西学の訳語が少量みられるが、その多くは、蘭学にせよ、英学にせよ、すでにあつた語（既存語）を用いたものである。これに對して和製漢語は、翻訳の際に日本語に対応する語がなく、日本語話者が新たに造語して当てた訳語である。

両者の違いは、中国製漢語の大部分が現在も消滅することなく使用されるが、和製漢語の半数近くは、現代語では消滅して使われなくなっていることである。

本稿では、この消滅した語を追つてみたい。そのことによつて、和製漢語と中国製漢語の違いが明白になるのではないかと考えるからである。言い換れば、日中の漢語は、ともに漢字音を造語要素（語基）として用いるが、その用い方に違いがあるのではないか。和製漢語の現存語と消滅語の相違とも重ね合

〈表2〉和製漢語の消滅した語

資料 (発行年)	漢語の数	A 中国製漢語 (借用漢語)	B 和製漢語（日本製漢語）		
			現存語 (a)	消滅語 (b)	合計 (c)
訳鍵(1810)	1,514	1,238 (81.8%)	185 (67.1%)	91 (33.0%)	276 (18.2%)
百科全書	文系 (1874)	3,003	2,098 (70.0%)	315 (34.8%)	590 (65.2%)
	理系 (1874)	1,395	734 (52.6%)	301 (45.5%)	661 (47.4%)

\* A + B (c) = 100 % / (a) + (b) = 100 %

させて検討してみたい。

近世の蘭学『訳鍵』は辞書である。辞書は、収録の段階である種の選択が行われるのが一般的であろう。一方、近代の英学資料『百科全書』は直接の訳文であり、翻訳のままのナマの資料である。『訳鍵』の消滅率は三三・〇%、『百科全書』では〈文系〉六五・一%、〈理系〉五四・五%である。

この数値の差は、辞書と直接の訳文の違いとともに、理系の語は前代の蘭学の用語、訳語法を踏襲したこと、その延長線にあつたことによるものであろう。しかし、〈文系〉の分野は、新たな挑戦があつたことが作用していると考えられる。こうした情況を確認することもあり、『百科全書』の和製漢語の消滅語を〈文系〉と〈理系〉に分けて検討することにした。

## 二 文系の語彙

(一) 「認定二」(『日本国語大辞典』(二版)にあるが『分類語彙表・増補改訂版』にない語)

慰楽 快美 価廉 気燈 丘岡 金類 檢奢 工銀 礦穴 弘張 財本 省約 常慣 常久 須用 造出  
大効 約券 要品 洋布 (以上「経済学」二六語中)

運環 確説 確知 感衝 記標 心経 説述 説正 説不 重学 内感 勉労（以上「論理学」一九語中）

彙別 円活 活画 華文 感移 言述 枯瘦 摧碎 至簡 詳明 深涵 心経 切情 注念 通解 伝話

発顕 汎廣 热奮 文氣 文詞 文想 補贊 明認（以上「修辞及華文」四七語中）

究覈 挟縦 緊圧 償補 硬固 初生 正写 節略 測知 天稟 暢発 伝遞 導子 瞬々 泛称 模像  
話学（以上「言語学」一二語中）

\* 價廉 Cost less → 廉価

明治初期には「価廉」と「廉価」が競合する形で存在したが、明治三十年代になると、新たに登場した「価廉」が姿を消す。両語とも和製漢語であるが「廉価」は江戸語にみえる。このように語基の倒置で対立する二語が競合する例は他にも多くみられるが、古くからあつた語が新語を駆逐する傾向にある。

\* 工銀 Wages → 賃金

「工銀」は、現代語では「賃金」になる。「工銀」の早い例で、明治一〇年代にもみえる。現代語になつた「賃金」は、江戸語である。このでも、古くからあつた語（既存語）が残つたことになる。

\* 財本 (Fixed) capital → 資本 (Floating) capital

「財本」は、現代語では「資本」になつてゐる。この他「財本」には「定財本」(Fixed capital) → 固定資本、「浮財本」(Floating capital) → 流動資本がみえる。

\* 須用 Supply → 供給する

〈Supply〉の現代語訳は「必要物を供給する」ことである。「〈須〉 すぐからく」「〈用〉 いる」の漢文訓読の語形から生まれた和製漢語である。

\*確説 Affirmation → 肯定／確知 Conviction → 確信

「確説」は、明治初期には広く用いられてくるが、西周が『致知啓蒙』（一八七四）で〈affirmation〉を「肯定」と訳した。「肯定」は、その後『哲学字彙』（一八〇八）に登録され定着した。「確説」も近代の和製漢語であるが「肯定」が残つたりふになる。

\*説正 Affirmative → 肯定／説不 Negative → 否定

「説正」「説不」は、直訳するに〈正しい意見・認められる意見〉、〈正しくない意見・認められない意見〉とでもなるうか。現代語では〈肯定〉〈否定〉となつていて。「説正」「説不」／〈肯定〉〈否定〉では、前者が認定の語基「正」「不」が後部に置かれているのに対し、後者は認定の語基が前部に置かれている。したがつて、後者の方が日本語の構造に準じている。

\*円活 Animation → 活発

現代語では〈活発〉〈熱意〉などと訳され語調の強い語になつていて。なお、最近では〈アニメーション〉〈劇画〉で知られる。

\*華文 Belles-Lettres, or Polite Literature → 美文

「華文」は、本資料「修辞及華文」の訳者、菊池大麓が、この資料の訳のために造つた語である。なお、坪内逍遙が『小説神髄』（一八八五—一八八六）の「文体論」で「華文」を用いているが、本例によると考えられる。

「」のよつた個人の用語や狭い範囲でしか用いられない語は残りにくく。

\*換語 Metonymy → 換喻

「換語」の早い用例である。「換喻」の「」と。他の修辞法の名称も「比喩」に合わせて「暗喩」「明喩」「隠喩」「直喩」などとなつた。「換語」は訳し替えられたことになるが、「」いうした体系をもつ語は、基本になる語（「」）では「比喩」）に、他の語も統一される。

\*切情 Affections → 愛情

「人間至大の感情中に（中略）悲哀、仁恤、恋愛、切情等ハ……」

Pity, tenderness, compassion, and the warm affections, .....

「切情」の早い用例である。「」の頃、訳語として造られた和製漢語であるが、現代語では「愛情」に取つて替わられている。なお、引用文例に見える「tenderness」（仁恤→親切）、  
<compassion>（恋愛→同情）にそれぞれ訳し替えられている。いずれも現代語は、以前からあつた既存語である。

\*伝話 Narrations → ナレーション／物語る「」と

「散文ノ伝話、細説、批評等事……」（菊池大麓訳）

together narrations, expositions, and criticisms, .....

「伝話」は「ナレーション」に「細説」は「解説」に訳し替えられている。「伝話」は、〈動詞+名詞〉で日本語の構成ではない。当時の洋学者は中国語に長けていて、こうした中国語の構成による造語がみられるが定着しつくつよつである。

## \* 償補 Compensation → 補償

「償補」の初出が、現代語の「補償」は中国製の漢語である。「償補」とは文字の倒置の違い。この既存語を倒置する用例は多くみられる。確認できないが、文字の倒置によって新語化する意識があつたのではないか。

## \* 暢発 Development → 発達

「発達・発展した」に訳し替えられている。明治初頭の洋学者の文章や翻訳文に出てくるが、二十年代になると用例がみつかないようである。

## \* 話学 Linguistic → 言語学

「じばを「話」(はなし)と認識している者は「学」を付けても「西洋言語学」の理解は得られなかつたであらう。もひとも、の「話学」を含む文は次のような内容になつてゐる。

「未ダ一定普通ノモノ無ク之ヲ称シテ或ハ比較文法学或ハ比較語学或ハ話学或ハ言語ノ学問ト謂フ」

*It is variously spoken of as Comparative Grammar, Comparative philology, Linguistic, the Science of language.*

以上は、文系の資料にみられる和製漢語のうち現代語としては消滅したが『日本国語大辞典』(11版)に登録されている語である。近代語の黎明期に誕生したが、それぞれの条件のもとで他の語に訳し替えられたものである。

その〈それぞれの条件〉を指摘したが、終章で日本語の訳語法としてまとめてみたい。

さて、次に「認定」として、いずれの辞書にも登録される(?)となく本資料に一回きり、またはきわめて短命のまま消滅していくた語を確認してみよう。

(1) 「認定」 (『日本国語大辞典』 (二版) にも「分類語彙表・増補改訂版」 にもない語)

価減	閥領	街卒	給受	虚費	鋸分	遽与	欠要	顯掲	現用	工価	墾耕	滾落	做法	資受	奢節
售壳	心徳	貸金	泰氣	泰空	貯有	通貨	報還	歉歉	法習	約定	(以上「経済学」九二語中)				
科題	起文	虚謬	倚頼	衆理	從語	誕人	斷理	統言	汎定	媒語	理変	(以上「論理学」四四語中)			
有天	運思	奧理	憶思	攬心	較大	簡老	帰正	窮阨	脇迫	行文	興感	興衆	詞家	收攬	獎言
象似	象喻	飾語	直詞	対言	通意	念神	霹靂	変情	隆愛	和否	(以上「修辞及華文」一六一語中)				
引説	銳音	竅孔	言出	口路	詞格	抵対	表像	密音	默定	(以上「言語学」五一語中)					

\*価減 Cheaper → 安価

現代語には「価減」の文字を転倒させた「減価」<price reduction>があるが、この方は「割引の」とか「価値がさがる」の意味で同義語ではない。

\*工価 Wages → 賃金

現代語には「工銀」<wage → 賃金>をみたが、この「工価」も<wage>の訳語である。このこの「工」は「仕事」<働き>の意味である。現代中国語には「工作」があり「労働」の意味で使われる。日本の現代語での「工」の用法は、接尾辞として用いることが多く「仕上げ工」(熟練工)「印刷工」などにみられる。今は、ほとんど使われなくなつた「工員」(職工)の名残である。

\*貨錢 Borrow money → 借金／貸金 Loan → 貸付金

〈貨〉は〈お金〉の意。「貨錢」では〈金錢〉にしかならないであろう。英語 <borrow> は〈担保を入れる〉、これを意味するから「借金」と訳し替える方が理にかなうこと。「貸金」に「こと」の「貸付金」の方が丁寧である。今日では〈ローン〉が一般的になつた。米語の移入によゐるやうである。

\*起文 Minor → 小前提／従語 Major term → 大前提 (premise) ／ 媒語 Middle term

「決理法」於テ主語ヲ 〈マイノルタルム〉 従語ヲ 〈メーハラルタルム〉 ト名づク故ニ又主語ト媒語トヲ記スル起文ヲ 〈マイノル〉 起文ト称シ従語ト媒語トヲ記スル起文ヲ 〈メーハラル〉 起文ト称ス」

The premise which contains the middle term and the major term is called the major premise, and often for shortness, the major; that which contains the middle term and the minor term is the minor premise, or the minor.

引用文の冒頭に見える「決理法」は <Syllogism> の訳で、今日では 〈二段論法〉 の訳である。〈二段論法〉は、大前提 <Major premise>、小前提 <Minor premise>、結論 <Conclusion> となる。引用の文では <Major term> 大前提、<Middle term> 小前提となるべきになつた。訳語も、理解が進むにしたがつて改められた。

\*憶想 Idea → 着想

\*簡老 Light → 輝き

\*詞家 Literature → 文学

\*愛憎 Address → 挨拶のいじめさせ、演説

\*興衆 Citizens → 市民、国民

- \* 錐音 Sharp → 嬰音・シャープ
- \* 鈍音 Flat → 変音・フラット
- \* 言出 Expression → 表現
- \* 黙定 Tacit → 暗黙

主なものについて現代の訳を付した。資料の『百科全書』の訳者が、それぞれの項目の翻訳のために造語した語が大部分を占める。辞典にも登録される」となく消滅した語である。やすやすと簡単に造つた語はないであろう。訳し替えは、それだけの理由があつてのじである。解釈の発展の履歴が読み取れよう。

### 三 理系の語彙

次に理系の語彙について検証する。じじで取り上げるのは、先に示した『百科全書』のうちの三点、すなわち「化学」「天文学」「物理学」である。これまでみてきた「文系」の語彙に準じ、二字の和

〈表3〉理系の消滅語

	消滅語		現存語		合計
	【認定1】	【認定2】	『百科全書』	蘭書の語	
化学	100	81	113	45	339
文学	60	36	47	15	158
物理学	46	37	56	25	164
合計	206 (57.2)%	154 (42.8)%	216 (71.8)%	85 (28.2)%	661 (100%)
	360 (54.5%)		301 (45.5%)		

- 〔注〕 1 現存語・消滅語の認定は『日本国語大辞典』(2版)による。  
 2 〔認定1〕は『文部省・学術用語集』ある語。〔認定2〕は『文部省・学術用語集』にない語。  
 3 〔認定1〕〔認定2〕の合計が100%になる。

製漢語の消滅語を取り上げる。なお、消滅語の認定には『文部省・学術用語集』を用いた。

〈表1〉〈表2〉と共に上記の〈表3〉に示した「消滅語」の率を確認しよう。理系の語彙は、文系の語彙と違つて、江戸期の蘭学の和製漢語を受け継いでいることである。そして、蘭学から受け継いだ語は100%現存していることである。

項目ごとに、術語を中心みていく。

#### (一) 術語以外の語

(a) 「認定一」(『日本国語大辞典』(二版)にあるが『分類語彙表・増補改訂版』にない語)

劇寒 混生 説示(化学)  
劇熱 現体 光暈 制抑 定立(天文学)

原由 体量 填充(物理学)

(b) 「認定二」(『日本国語大辞典』(二版)にも『分類語彙表・増補改訂版』にもない語)

稀渙 恭菜 工造 消解 漸徐 詳認 然備 鎌展 捣粹 離在(化学)  
引重 活圈 軽虚 擾動 論拳(天文学)  
振行 老柏(物理学)

(a) \* 劇寒 Intense cold → 激熱

現代語では〈劇〉は〈激〉になる。文字の変更。

\* 定立 Rest → 静止

「定立」は、現代語では哲学用語として用いられるが、一般には〈静止〉が使われる。

\* 漸徐 Slowly → ゆっくり

現在は「ゆっくり」と和語で訳される。

\* 鎖展 Recovering → 回復ス

〈鎖〉は〈かなづち〉〈あたえる〉の意。「鎖展」では理解が難解であろう。一方、英語の〈recover〉の現代訳は〈回復ス・再生ス・本に戻る〉などが当たられる。最近では、スポーツなどで〈リカバリ〉（体勢を整える）と音訳で用いられることがある。

\* 論拳 Enter → 立ち入る

「此書ニ於テハ之ヲ論拳セズ」

into which we cannot enter.

〈enter〉の原義は〈入る〉であろう。挙例の文は〈ノの書では、ノのノ言ひは立ち入らない〉と述べられるのである。

(a) 「認定一」の語と、(b) 「認定二」の語との間の相違を明確に説明するにはできないが、両者に共通なのは、

文字を含む難解な語は訳し替えられる傾向がみえることである。また、文字の時代的な対応、たとえば〈劇〉から〈激〉のような変更もみえる。さらには、原語との関わりによる訳し替えも考えられよう。

## (二) 『文部省・学術用語集』に登録されていない語

(a) 「認定一」(『日本国語大辞典』(二版)にあるが『文部省・学術用語集』にない語)

鉛糖	攪和	礬素 (化学)
光環	行星	星霧 重星 (天文学)
溢出	惰力	導温 (物理学)

(b) 「認定二」(『日本国語大辞典』(二版)にも『文部省・学術用語集』にもない語)

鉛簾	牽延	元基 食子 濬着 蓬素 力性 可展性 氣毒性 驗熱標 脆硬体 水素藏酸 保燃元素
伝染性有機毒	複合元基化学	(化学)
引星	環蝕	琴星 海狸星 穀女星 小行星 天后星 武女星 變化星 (天文学)
運温	擠力	動則 複動 寒温器 共行動 独立動 滴流動 動水学 (物理学)

(a) \* 硼素 Aluminum → アルミニュウム

\* 光環 Ring → 土星の環・月の傘

現代語では〈光環〉、漢字の制限から〈環〉が〈環〉になった。

\* 行星 Planet → 惑星

J・C・クボンは『和英語林集成』(一八七六)で〈遊星〉と訳してゐる。<planet>の語源は、ギリシャ語の〈πλανήτης〉の意。

\* 星雲 Nebula → 星雲

\* 重星 (複星) Double and Multiple Stars → 二重星

肉眼では一つしか見えるが、望遠鏡では二つ以上に分離して見える星のことを。

\* 惰性 Inertia → 惯性

\* 運温 Convection → 対流

\* 擰力 Repulsion → 斥力

〈撣〉は〈押す〉、〈引く〉の対。〔撣力〕は〈引力〉(Attraction)の対義語である。

\* 可展性 Malleable → 展性

「可展一性」は〈打ち延ばしのやうな〉。(〈展〉は〈延ばす〉意) 現代の英和字典の中には〈可鍛性〉と訳すものもある。『文部省・学術用語集』は<malleability>に〈展性〉を当ててゐる。

\* 脆硬体 Brittle solid → 固体・固形物

「脆硬体」は、現代語では廢語になつてゐる。この語の訳語法は<br brittle>に〈やらい=脆い〉を当てて

〈solid〉に〈硬体〉を当てて熟語とするものである。現代語（『文部省・学術用語集』）では、〈solid〉に〈固体・固体物〉を当ててゐる。

明治期の訳語法、とくに理系の用語は、逐語訳を原則としている。この例のように〈brittle solid〉の一語の熟語に対して、一語（）に分解し語基（造語要素）として、それぞれに訳を当て、それを再び組み合わせて二字熟語にするのが基本である。

\* 水素蔵酸 Hydrocyanic → シアン化水素

〈シアン〉は、オランダ語の〈cyaan〉（英 cyan）で、蘭学では音訳して用いた。〈水素〉は蘭学の用語。

\* 保燃元素 Combustion → 燃焼

「保燃」は、今は〈燃焼〉（『文部省・学術用語集』）と訳すが、〈燃焼元素〉はない。四字熟語は「二字」の構成が基本であり、この語も「保燃+元素」で、現代語では〈保燃〉が消滅し〈燃焼〉と訳し替えられた。〈元素〉は蘭学の用語であるが、明治初期には、とくに理系では、蘭学の用語が語基として活用された。

\* 複合元素化学 Chemistry of compound radicals

（）した多数の語基を並べる複合語は、化学や医学などに多くみられる。複雑な要素からなる物質を一語に括する複合語の構造である。逆にいえば、どんな複雑な組み合わせの対象物も一語にできるといつて造語法である。結局、化学記号（元素記号）をいつても並べて表すのと同じ方法である。語を一見して、内容が理解できるといつて合理的である。

\* 穀女星 Ceres → ゼレス（ギリシャ神話で豊年の女神）

星の名称は、現代語ではカタカナ語の音訳が基本である。明治期は、ギリシア神話やローマ神話に根ざす意訳によつた。「化学」の分野には「」した訳はみられない。ただ、鉱物学で、石の名前などには、「」した「見立ての命名」が用いられている。

\* 寒温器 Thermometer → 温度計

「此百度寒温器（センチグレード）ト称スル器ニ従ヘバ水ハ零度ニ於テ氷リ百度ニ至リテ沸騰スベシ」

According to this thermometer, which is called the centigrade, water freezes at 0°, and boils at 100°.

「寒温器」今は〈温度計〉を使う。〈寒暖計〉の初出は蘭学であるが、蘭学時代は〈驗温器〉が優勢であった。〈体温計〉は、明治三〇年代に入らないとみえない。なお、引用文中の〈百度寒温器〉は、現代でいう〈セ氏温度計〉のハンドである。

\* 共行動 Common motion → 共同行動

「共行動」は〈共に働く〉〈一緒に動く〉意味。構成は〈共〉 + 〈行動〉で既存語を組み合わせたものである。三字語は、このように二字語に前接、あるいは後接の語基を伴う構成になるのが一般的である。その多くは既存語・既存語基の組み合わせであるため、はじめてみる語でも、容易に理解できる特色をもつてゐる。この他に「前進動」（前進）+（動）、「独立動」（独立）+（動）もみえるが、同じ構造にである。これらの語は、現代語では消滅しているが「<common> 共通一」と 統一しており、たとえば <common-base circuit> は〈共通ベース回路〉となる。（『文部省・学術用語集』）。これにしたがい「共行動」

(<common motion>) は「共同行動」と四字語になる。

『百科全書』の七項目を〈文系〉と〈理系〉に分け、ここでみられる和製漢語のうち、とくに〈消滅語〉の構造を検証する」とで、それらの語がどうして消滅したのか。そこから和製漢語の造語法・訳語法を導き出すことを試みた。以下に、その結果をまとめておく。

#### 四 まとめ

一 日本語の基本構造は〈名詞+動詞〉(N—V)であり、いわゆる^SVO^ (文の基本語順) である。これに従わない語は消滅する傾向が強い。

例、\*供給ス→須用ス (漢文訓読) \*物語る→伝話 (V—N)

二字音形態素である漢字が音訓両用の読みをもつていることが有効である。和製漢語の基本は、音読 (漢語) したのち、これを訓読 (和語) することである。したがって〈語基〉として有効なのは〈音訓両用漢字〉である。難解な語、定訓をもたない漢字を語基とした語は消滅しやすい。

例、\*回復ス→鎌展ス

三 術語は、多少難解な漢字 (形態素・語基) であつても残る傾向がある。しかし、これらの術語も現代語では、

時代の要求する漢字の制限によって書き換えられることがある。

例、\*激寒→劇寒 \*激熱→劇熱

四 個人の用語は定着しにくい。新語が定着するには、ある種の条件が必要である。たとえば〈洋字〉（アルハベットのこと）「知説」などは、西周の論文に一回だけの使用例しかなく消滅している。

例、\*美文→華文

五 語の競合による消滅、急速な新語（和製漢語）の造成によって、既存語と新語が競合する現象が起こった。たとえば〈抵抗〉と〈抗抵〉が、明治中期まで競合するが、古くからあつた〈抵抗〉が残つた。とくに、こうした文字の倒置による同意の語の競合現象が目立つ。

例、\*廉価（江戸語）→価廉 \*賃金（江戸語）→工銀

\*肯定→確説（両語とも近代の新語であるが〈肯定〉が辞書に登録）

\*補償（中国製）→償補（和製）

六 語の統一意識が発生すると、その力が働き書き替えられる。

例、\*換語→換喻（比喩）による統一

\*共同行動→共行動（Common motion）。〈common〉を〈共同〉と統一した」とによる変更。

七 誤訳と共に内容の理解の発展により訳し替えられることがある。

例、\*言語学（Linguistic）→話学（Linguistic）

\*借金→貨錢（Borrow money）\*貸付金→貸金（Loan）

\*三段論法→決理法 \*起文→小前提

\*市民・国民→興衆△Citizens>

八 音訳への変更、とくに理系の語に顕著にみえる。蘭学・明治初期の洋学における外国語の取り入れは、原則として漢字に訳す方法で行われた。そのため、術語であっても難解な語が多い。これに対し、現代語ではカタカナ書きの音訳を多く使う。その傾向が反映してかどうか分からぬが、難解な語、意訳による語などは、音訳に改められるようである。現代の学術用語集は音訳が目立つ。

例、\*アルミニウム→礬素△Aluminum>

\*シアンカ水素→水素藏酸△Hydrocyanic>

\*ゼレス→穀女星△Ceres>

\*パラス→武女星△Pallas>

\*ジュノ→天后星△Juno>

座名は、ギリシャ・ローマの神話による〈見立て命名〉が多く、現代語では音訳に移行されている。

本文で指摘した用例に關わってまとめてみた。さらに、詳細な議論が必要であるが、ご指摘いただければ幸いである。

〈注〉

- (1) 拙著『近代語の研究—日本語の造語法・訳語法—』(一〇〇四年／明治書院、第Ⅲ章) 参照。
- (2) \*原書W. R. Chamber's "Information for the People" V2, 868. London. (高野所蔵)  
\*訳書文部省編纂局『百科全書』九二一冊。一八七二—一(明治六—同一七年) (高野所蔵)
- (3) 蘭学で〈腺〉が造成され、語基として活用された例があるが〈扁桃—腺〉が、近代の洋学では皆無である。  
(なお、本論文の資料は、〈注1〉同書によった)